

等身大

過大評価、過小評価、私たちは他人を見るとときに実に多くの見方をします。あてがはずれま
すと、「あんな奴だと思わなかった」「見損なつた」でありますし、良い方に向きますと「見直
した」「おどろいた」であります。他人の心をのぞき込むのは、結構難しいものです。

自分自身も他人の評価には敏感なものであります。「良く見せたい」「嫌われたくない」との思
いから必死になって自分を取り繕って、背伸びをしながら生きていく方が多いようです。

この事は一概に否定することはできません。この思いが自分を磨いたり、上品さを生み出す
原動力にもなります。人間関係を上手に保つのはこのような事も必要な要素でありましよう。

しかしその事に執着しすぎますとおかしくなつてまいります。背伸びをしている自分が本物
なのか、何が自分なのかさえも見失われてきます。本当のことは他人は本人の前では言わない
ものです。陰口ならいくらでも言いますが（悪評は）・・・他人の評価は自分には伝わって
まいりません。実はその聞こえない部分こそが正当な自分の評価のようでもあります。

そうなりますと私たちは自分自身を「カン違い」しながら生きていくのかもしれないね。
社会的地位や、名声、富がどれだけ私たちの自己評価を誤らせていることでしょうか。

そういえばこの度の選挙ではカン違いで議員になった人もいるようです。世の中全体がカ
ン違いしながら進んでいると思うのは考えすぎでしょうか。高い地位に長く就いていますと、
その高さが自分自身の評価と違い、学歴が高いとそれが自分そのものと思ひこむ、それは自分
の着ている服と一緒に、脱いでしまえば、裸の自分がいるだけなのです。「自分の事は自分が一
番よく知っている」「こんな事を言う人は実は何も自分のことはご存知ないのです。自分を過大
視過ぎますと、自惚れ、傲慢になりますし、過小視しすぎますと卑屈、ねたみ、そして自暴自
棄に陥りやすくなつてしまします。私は僧侶として葬儀や、法事の場に立つとき参詣の方々が
合掌して下さつたり、丁寧な挨拶までいただきます。そんな時僧侶になりたての頃は、照れく
ささも手伝い、心の中で「私はそんな人間じゃない」とつぶやいておりました。ところが、い
いとシになつてまいりますと、それが当たり前のようになつてまいります。これが私のカンち
がいなのだと思ひます。「名利の大山に迷惑して」（名声とか利欲に迷いに迷い）の私そのものな
のです。なぜそんなことが起きるのか、それは等身大の自分に気づかないところからきている
のです。他人の事、他の情報などには分析もし、よくわかるようになってきています。しかし
自分自身の事についてはどうでしょうか。学校でも会社でも学ぶのは私ではなく私以外の事を
研究していることが多いようです。他のことには立派な評論家、分析家になつていても自分に
ついてはサツパリのようです。まな板に置いて切り刻むのは私以外であります。仏教はこの私
を仏法のまな板に乗せて切り刻むことです。それは他人と比較することでもありませんし、勝
ち負けを競うことでもありません。比べるモノもない、たった一人の私を凝視することです。
それは、人として生まれた有り難さ、かけがえのない本当の等身大の私との出会いです。